

SRID NEWSLETTER

No. 317 *A P R I L* 2002 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎
〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

4月号 内容 マルクスの考え方は死んでしまったのか
東洋大学・国際地域学部・教授 賀来公寛

お知らせ

1. 会員異動 不破 吉太郎さん
(財) 日本国際交流センター シニア・リサーチ・アソシエート

小森 剛さん 国際協力事業団 アジア第一部 東南アジア課

中之藪 亮さん ミツミ電機台湾支店

荒川 博人さん 国際協力銀行 開発第一部 部長

2. 総会 4月26日(金) JBICにて 午後6時30分から

3. 会員レポート 事務局に未提出の方はご提出ください。

マルクスの考え方は死んでしまったのか

東洋大学・国際地域学部・教授 賀来公寛

現代世界はグローバリゼーションの名のもとに市場主義が世界を圧巻している。社会主義の諸国も少数を残して、市場経済化した。このような世界の動向を見ると、マルクスとマルクスの唱えた社会主義は死滅したということであろうか。

私自身は必ずしもそうだとはいえない。人間の基本的な“欲望”について最も鋭いメスを入れたのはマルクスである。人間の持つ様々な欲望（物欲、性欲、私有欲）を人間の根本的な罪悪と考えたのは、キリスト教のカトリック派であった。新教（プロテスタント）は、こうした総ての欲望を罪とはせず（と云うのも性欲が罪となれば、人間の子孫は死滅してしまう）、個人的な私有欲をむしろ罪と考えた。マルクスはこの個人的な私有欲のうち、人間が他者の物を搾取することが人間の根本的な罪悪であると考えた。

資本主義社会は非情である。競争に勝ち残った者は豊かになり、競争に負けた敗者は自己の労働力を安売りしサバイバルをはかる。他方で競争社会はより高度な技術・商品を開発する原動力となる。この原動力はシュンペンターの言う「創造的破壊」を繰り返し、常に市場は新製品、新サービスであふれることになる。社会主義では見ることが出来なかったダイナミックな生産活動である。

人間は自分の物質的豊かさをまず第一に考える。物質的要望の充足である。その結果が現在の世界情勢に反映されている。西ヨーロッパでは、こうした物欲の基本に、人間としての基本的権利、表現の自由など、「個人主義」が社会を支える基盤となった。この獲得のプロセスで発生したのが「市民革命」であり「ブルジョワ革命」である。日本など「後発組の先進国」はこうした「市民革命」を経験しないで、近代化の道を進んだ。その結果が今日の日本の“豊かさ”である。

「市場の論理」が拡大・強化されればされる程、豊かな国と貧しい国の格差は拡大する。我々はこうした現実をただ見ていれば良いのであろうか。ODA は沢山の道路、灌漑設備、社会基盤を開発途上国に作ったが、貧富の格差は減少したのか。アマルテア・センは人間の権利、能力（capability）の強化を提言したが、「市民革命」を経験しないで、こうしたことが可能なのか、市民革命を経験しなかった日本

の経験は役にたつのか。むしろ日本の経験、特に「国家」が市場の育成に積極的に関与した事実は、開発途上国で「開発独裁」をむしろ強化することにならないか。

従来の経済学においては、「人間」とは“合理的”な判断が出来る存在として理解されてきた。アダム・スミスが考えたように、人間は“競争”という市場でのメカニズムを通じて、より大きな富を得ることが出来ると考えられた。しかし人間はそれ程“合理的”な判断が出来るのであろうか。また市場での競争は、社会全体の富を増大させるだけでなく、公平な分配を約束出来るのであろうか。

人間には個人としての自由があり、これは絶対に譲ることの出来ない基本的な権利であると述べたのは、ジョン・ロックであった。西欧社会は市民革命（またはブルジョワ革命）により、個人個人が市民としての基本的な権利を得た。しかし市民革命を通じて獲得された個人の権利は、社会というシステムの中で、公平な分配を可能にしたいということが出来るのであろうか。ここで問題になるのは、従来の経済学では社会の中に“富める者”と“富めない”を生ずるシステムは、“個人としての基本的権利”という目的のため、必要悪として認知されてきたのではないか、と云う点である。

このように考えていくと、今までの経済学で想定されてきた人間像について疑問が残るし、経済学と社会における公平な分配についても疑問が残る。人間はそれ程合理的な判断が出来る存在ではない。今日の社会現象を見れば、不登校児童、家庭内暴力、泥棒、強盗、保険金目的の殺人、政治面での汚職、企業間の談合など、数えきれない程の“不合理”な行為がまかりとおっている。逆の見方をすれば、人間ほど不合理な判断をする動物はいない。渡り鳥は季節になれば、移動する。しかし、人間はその豊かさと反比例して道徳的価値観を喪失してしまった。

社会の富を再分配するために、修正資本主義という考え方が導入され、富んだ者が大きな税金を払い、富の再調整が行われるようになった。しかし累進課税の導入だけでは、富の再分配を実施することが困難なことは明白である。最近では都心の高層マンションが良く売れるという。階が上がれば見晴らしも良く、1億円以上の物件に人が殺到するという。富める社会は人間の利己心、欲望を増大させる。日本でお金持ちと云われる人が、社会事業のために、財産を贈与したという話しはあまり聞かない。市民革命を経験しなかった後発国は、市民という共通の価値観が無い。

こうした人間の欲望に最も鋭く分析したのは、マルクスである。しかしマルクス

の期待した社会主義は、現実には崩壊してしまった。社会主義国の崩壊は、マルクスの考え方の惨敗を意味するのだろうか。私はそうは思わない。現実の社会主義は党の官僚化、個人崇拜といった、極めて「人間的」要素が入りこんだが故に、失敗してしまった。今後資本主義がますます高度化し、富の増大が速度をまして行くと、人間の欲望や個人的満足はますますエスカレートして行くであろう。その時に初めて人間は改めてマルクスの分析に耳を傾けることになる、と思っている。

私個人としては、今後「開発教育」が大事になると考えている。欧州連合（EU）の本部があるブラッセルにあるインターナショナルスクールでは、ナポレオンについて講義する時、フランス人には英雄であっても、他国の人々には侵略者になる、その両方を正解として教えているという。日本もこうした教育を考える時期だと思う。